

## 石井鶴三の名刺コレクション

小野文子（信州大学教育学部）

現代社会では、自己紹介を目的として名刺を交換することが一般的であり、ビジネスにおいて名刺交換は仕事を始める第一歩となる。名刺のことを欧米では広く business card といい、個人よりも所属する組織や役職を強調するもので、仕事をする上で必須のものである。しかし、イギリスやアメリカでは、古くは姓名のみを記した calling card あるいは visiting card が使用されていた。calling や visiting は訪問を意味するが、訪問者が不在であった場合に、自分の名前を書いたカードを残して訪問したことを知らせるために使用したりした。つまり、business card はその言葉通り職業用であるが、自分の姓名のみを記した visiting card や calling card は社交的なニュアンスが強く、コミュニケーションの手段として、個人的なレベルで使われてきたものであった。

東洋に目を向けると、中国では名刺の起源は漢代以前に遡るとい<sup>1</sup>。現代の中国語で名刺を「名片」というが、もともとは「名刺」や「名謁」あるいは「名紙」、「名帖」といった。紙ができる以前には、竹や木を削って姓名を書いたことから「刺」というようになったという説や、意見をうかがう「刺取」が語源である、など諸説あるという。「名刺」や「名謁」は形状や記載されている内容などによって厳密には使用実態は異なるものの、基本的には、訪問の際に門前の箱に姓名と身分を書いた札を投じて取次ぎを要請した習慣において使用された。つまり、拝謁を媒介するためのものであり、交際儀礼の必需品であった。従って、中国においても名刺は古くからコミュニケーションの手段として用いられたのである。

日本における名刺の歴史に関する専論を見出すことはできなかったが、少なくとも 19 世紀初期には姓名のみを和紙に記していたことが、江戸幕府で右筆を務めた屋代弘賢（1758 - 1841）の残した『名紙譜』から知られている。しかし、石井研堂の記述には、「今日のやうに、名刺を出して、自分の姓名を先方に通ずることは、古来の風俗ではあったが、今日ほど多く用ひるに至つたのは、矢張西俗の傳播である。」とあり、続けて、安政元年の正月にアメリカ使節団との面談の際にアメリカ側から名刺を渡され、日本の役人も役名と姓名を記した名札を出したことが、今日のような名刺交換の先がけとなったとある<sup>2</sup>。「名刺」という文字から判断すると、まずは中国から日本に伝来したことが推測され、中国での古来の「名刺」という言葉をそのまま用いてはいるが、現代我々が用いている印刷した名刺は幕末に西欧から入ってきたもので、明治期以降に広く普及したことが分かる。

前置きが長くなったが、つまり、名刺は洋の東西を問わずそれぞれの文化の中で自己紹介やメッセージを伝えるという役割を果たしてきた。それでは、石井鶴三の名刺コレクションは一体どのようなものであり、研究上どのような役割を果たすのだろうか。現在信州大学附属図書館で確認している石井鶴三の名刺コレクションの数は、およそ 1,000 枚である。そのうちの愛蔵 2 - 6 ~ 愛蔵 2 - 327 を平成 23 ~ 24 年度に撮影し、愛蔵 2 - 6 ~ 愛蔵 2 - 189 のおよそ 180 枚をエクセル表にデータ入力した(表 1)。これらの名刺を概観すると、彫刻家でありながら、挿絵、版画、油彩、水彩と多岐にわたる鶴三

の芸術活動を裏付けるかのように、彼の交際範囲の広さを知ることができる。また、名刺の多くには日付やメッセージが記されており、鶴三の生活の中で名刺が様々な役割を果たしたことがわかる。

鶴三の名刺コレクションは、同時代に第一線で活躍した芸術家だけでなく、財界人、大学教授、医師、編集者、新聞記者、小・中学校教諭や校長、設計事務所や行政の担当者のもなど、実にさまざまである。印象的なのは、倉敷レイヨン株式会社社長の大原總一郎（1909 - 1968）（愛蔵 2 - 174）や報知新聞社代表取締役社長の正力亨（1918 - 2011）（愛蔵 2 - 192）などの大物財界人と同様に、地方の小・中学校教諭や新聞記者に至るまで、丁寧に保存されていることである。例えば、1924 年から上田の小県上田彫塑研究会主催の講習会に関わり、以来 1970 年まで信州の美術教育に関わった鶴三らしく、小諸市芦原中学校校長増田仁義（愛蔵 2 - 40）の名刺がある。増田仁義は『信濃教育』の第 827 号に「教科書を通して見た図画教育の変遷とその問題点」を執筆しており、この中で「なおこの図画教科書は、一昨年石井鶴三先生にも御覧願ひ、直接先生から教科書についての御感想をおうかがいし、さらに自由画教育についても、その提唱者山本鼎氏と特に関係も深く、その間の事情もよく知つておいでなる先生の御意見をお聞かせいただいたのである。」と書いており、鶴三から美術教育について影響を受けたことが分かる<sup>3</sup>。また、同校長は昭和 10 年に長野市吉田小学校の校章をデザインしたと思われ、信州大学教育学部で美術教育に従事する筆者にとっては感慨深いものがある。

名刺コレクションの中には、実兄の石井柏亭（1882 - 1958）（愛蔵 2 - 16）、平櫛田中（1872-1979）（愛蔵 2 - 45）、北澤楽天（1876 - 1955）（愛蔵 2 - 19）、山本鼎（1882 - 1946）（愛蔵 2 - 23）など、身近な人々の名刺も含まれている。柏亭の名刺には、「中道」という佐渡の篆刻家を紹介することが書かれており、「鶴三様」とあるのは、兄弟としての親しさを示すものである（図 1）。また、山本鼎の名刺にも、表面に「石井鶴三様」、裏面には「上田君を御紹介します。よろしく御願ひします。四月十九日」とあり、上田という人物が山本鼎の名刺を持って鶴三を訪ねたことが想像される（図 2）。このような身近な人たちとの間で、名刺はメッセージを伝える役割を果たしていたことが分かる。

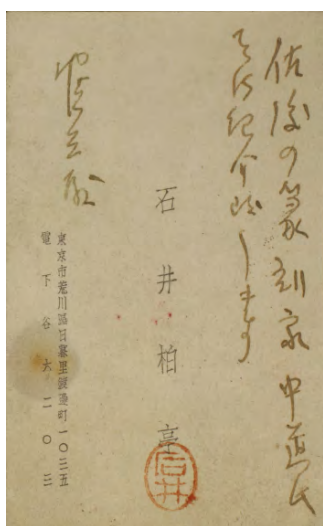


図 1 石井柏亭（愛蔵 2 - 16）

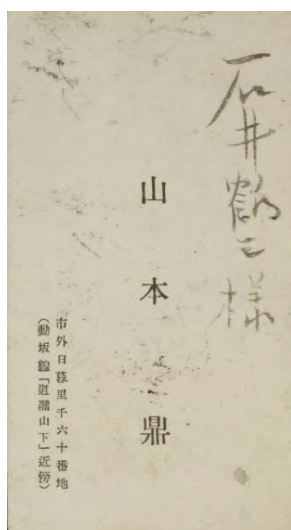
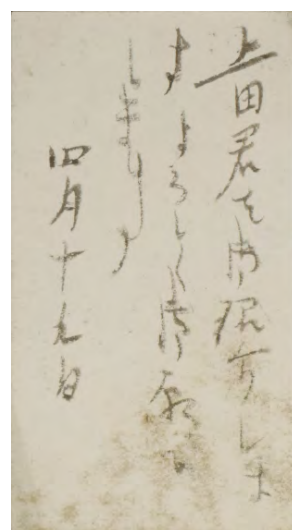


図 2 山本鼎（愛蔵 2 - 23）



名刺の中には、姓名のみが記されたものがある。例えば柳田謙吉（愛蔵2－118）の名刺には彼の姓名のみが記され、表面から裏面にかけて鶴三へのメッセージが書き込まれている（図3）。このメッセージは、柳田が『トバエ』の編集をすることになったことを伝え、3月15日発行予定の号のための挿絵を鶴三に依頼するものである<sup>4</sup>。そして、「お願いしたいと思って来ました」とあることから、柳田が鶴三宅を訪問したところ、鶴三が留守であったために、自分の名刺にメモを書いて用件を伝えようとしたことが分かる。このような場合、柳田は自分の名が記された名刺を、メッセージを伝えるためのカードとして使用していたことが分かる。

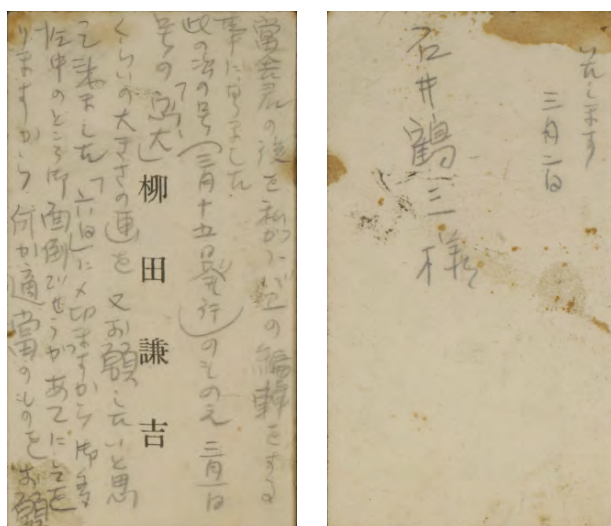
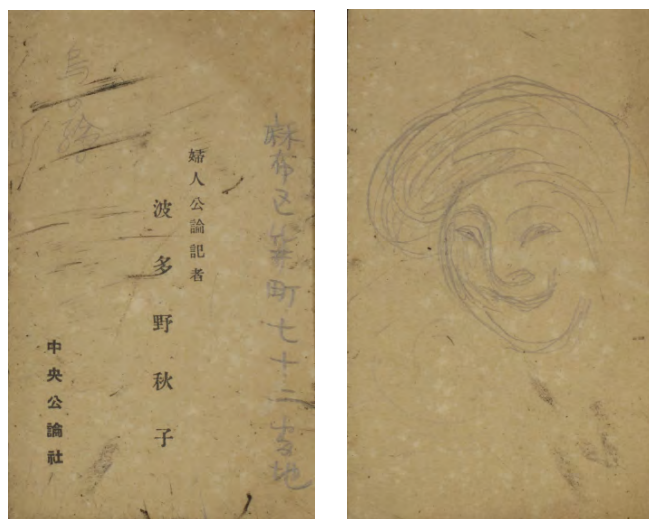


図3 柳田謙吉（愛蔵2－118）

鶴三の名刺コレクションで目を引くのは、鶴三の筆跡で書かれた「来宅」や「来臨」、「横浜春陽会の帰り」<sup>5</sup>、「版画展懇親会の席会ふ」<sup>6</sup>などの簡単なメモと日付である。時には、「せの高い人」<sup>7</sup>など、その人物の特徴が書かれているものもある。人物の特徴といえば、中央公論社婦人公論記者の波多野秋子（1894－1923）（愛蔵2－114）の一枚は大変興味深い。波多野秋子は1923年に小説家有島武郎（1878－1923）と心中したことでセンセーションを巻き起こした人物であるが、名刺の裏面には、彼女の姿が描きとめられている（図4）。そして、有島武郎の実弟である有島生馬（1882－1974）の名刺も鶴三の名刺コレクションの中に（愛蔵2－112）として所蔵されている。名刺コレクションがどのような順番で保存されていたのかははっきりとしたことは分かっていないが、この二人が鶴三と一緒に尋ねたことがあるのだろうか。波多野秋子の名刺の表面には「鳥の會」と書いてあるように見えるが、波多野が鶴三に『婦人公論』のために挿絵を依頼した可能性もあることから、このことについては今後調査したいと考えている。また、波多野秋子は上述のように1923年に亡くなっていることから、鶴三は1974年に没するまで、この名刺を50年以上もの間保存し続けていたことが分かる<sup>8</sup>。



(図4) 波多野秋子 (愛蔵2 - 114)

さて、それでは鶴三が名刺に書き込んだ日付やメモを日記と照らし合わせてみる。例えば、大宮市総務部長中田信夫(愛蔵2 - 60)の名刺の裏面には「40. 4. 10 来臨 建設課長 中山氏 中田氏 総務部長 荻原氏 久住氏 教育委員会社会教育係長 記念館 竣工は今年中か来春よてい」とあるが、同日の日記には「12時半大宮市の人三人荻原氏の案内で来臨 楽天記念館建設図見せられホール正面階段下へ楽天先生胸像据えたいとのこと 諒承する」とある<sup>9</sup>。楽天記念館とは、北澤楽天の晩年の住居跡に建てられた、さいたま市立漫画会館のことである。この名刺のメモから、同館が1966(昭和41)年に開館するおよそ1年前に行政からの依頼により鶴三が北澤楽天の胸像を制作したことが分かる。この他、黒岩喜代子(愛蔵2 - 176)の名刺には、裏面に鶴三の筆跡で「41. 2. 2 来宅 黒岩淡哉先生令息夫人」とあり、同日の日記を見ると、「黒岩淡哉先生令息夫人お出であり先生のことお子さんのことなどその後の話うかがう 高村光雲さん筆の竹に雉子の絵みせらるる 珍しいものである」と書かれており、名刺の日付と日記の内容が一致していることが分かる<sup>10</sup>。その他にも、株式会社三越の渡辺浩男(愛蔵2 - 156)の名刺の裏面には鶴三の筆跡で「44. 11. 2」とあり、この日の鶴三の日記には、「10時三越の人來」と書かれている<sup>11</sup>。この名刺のメモには判読することのできない文字がいくつかあるものの、この人物がいくつかの美術作品を鶴三宅に持ってきたことが推察される記述がみられる。

さらに興味深いことに、鶴三自身の作品の価格についても多少の情報を得ることができるメモが記されている一枚がある。学校法人五島育英会法人事務局次長の篠原幸英(愛蔵2 - 80)の名刺の裏には、「35. 11. 14 来宅 五島慶太氏胸像台座 文字と金 100,000 とどけられる」とある。鶴三は1854(昭和28)年7月からこの作品の習作に取りかかり、1961年2月に除幕式に出席していることから、およそ7年の歳月をかけて制作し、おそらく完成は名刺の日付にある1960年11月頃であったことが想像される。

以上のように、名刺は、日記と照合することで、そこには記されていない情報を補足する資料となる

ことは明らかである。そして、日記のみでは知ることのできない鶴三の生活を立体的に浮かび上がらせてくれる。

石井鶴三の名刺コレクションは、ほんの小さな断片ではあるが、様々な情報を我々に伝えてくれる。書簡との照合はまだ行っていないが、例えば書簡に見られる人物が不明な場合、名刺をたどることでその人物を見出すことができる可能性もあるだろう。また、名刺に書き添えられたメッセージやメモが、ジグソーパズルのワンピースとなって、書簡の解読やこれまでつながらなかった人間関係などを明らかにするかもしれない。かように、鶴三の名刺コレクションの整理は、今後石井鶴三研究を進める手がかりとなることが期待される。

**謝辞** 名刺の撮影については、蛭田直先生にご協力いただいた。また、名刺に書かれているメモの解読には小林比出代先生にご教示いただき、本稿の校正は大島賢一先生にお手伝いいただいた。厚くお礼申し上げます。

- 
- <sup>1</sup> 中国、日本の名刺については、次の文献を参考にした。岸本美緒「名刺の効用—明清時代における士大夫の交際」『人と人の地域史』1997年、243-276頁。呂静、程博麗（江村知朗訳）「漢晋時期における名刺・名刺についての考察」『東洋文化研究紀要』第160冊、東京大学東洋文化研究所、2011.12、536(101)-564(73)頁。
  - <sup>2</sup> 石井研堂「名刺の使用」『明治文化研究：新旧時代』明治文化研究会、4巻4号、1928年（引用は複製版 明治文化研究会編 公文庫、1972年、38頁）。岸本美緒、前掲書、273頁参照。
  - <sup>3</sup> 増田仁義「教科書を通して見た図画教育の変遷とその問題点」『信濃教育』第827号、1955年11月、103-111頁。
  - <sup>4</sup> 発行年は記されていないが、鶴三は福田美佐に宛てた手紙に「それから今度トバエといふ漫画雑誌が創刊される事になって、私も繪を一枚書きましたが、これから毎月其方へ何かかく事になるかもしれません。」と書いていることから、1916年と推測される（大正5年11月11日付書簡）。『石井鶴三書簡集Ⅱ 福田（石井）美佐宛書簡』形文社、1996年、63頁。鶴三の『トバエ』挿絵については、『石井鶴三全集1』形象社、1988年、454-456頁参照。
  - <sup>5</sup> 海老名九平（愛蔵2－55）
  - <sup>6</sup> 朝日新聞東京本社編集局 山口一郎（愛蔵2－88）
  - <sup>7</sup> 上電観光株式会社 取締役社長 山浦国久（愛蔵2－54）
  - <sup>8</sup> 保存という視点から見ると、東京パック記者時代の名刺（愛蔵2－325）もコレクションの中にあるが、『東京パック』の記者であったのは1906年から1913年の8年間であり、鶴三が丁寧に自分の名刺を保存していたことが伝わってくる。
  - <sup>9</sup> 『石井鶴三日記』Ⅳ 形文社、2005年、282頁。
  - <sup>10</sup> 同上、311頁。
  - <sup>11</sup> 同上、429頁。